日本百街道紀行

街道とまちづくり 第45回 五箇山街道

「一流の田舎」を目指して 五箇山街道とSDGs

南砺市長（富山県） 田中幹夫

世界文化遺産の相倉合掌造り集落

南砺市の概要

富山県の南西部に位置する南砺市。平成16年に4町4村が合併して誕生した人口4万9492人（令和2年12月31日現在）の本市は、散居村の広がる平野部と、険しい山々の連なる山間部によって構成されている。平野部には、平成30年に「宮大工の鑿一丁から生まれた木彫刻美術館」として日本遺産に認定された木彫りのまち・井波や、越中の小京都・城端をはじめとした、彩り豊かな街々が広がる。また、山間部の旧平村、上平村、利賀村地域は「五箇山」と称され、相倉・菅沼の合掌造り集落が世界文化遺産に登録されている。現在、平野部と山間部の間には国道304号や東海北陸自動車道が通り、冬季通行が困難な秘境の面影はないが、かつては五箇山街道と総称される複数の峠道が両地域を結び、人や牛による物資の運搬が行われていた。

五箇山の産業と五箇山街道

冬には豪雪に見舞われる五箇山。その地理的特性は、合掌造り集落をはじめとする独特の景観を生み出した。しかし、五箇山の地域の存続は、五箇山街道を介した平野部との結びつきによって図られてきた。

例えば、火薬の原料となる塩硝の生産は、戦国時代から江戸時代にかけて、五箇山独特の産業として生活を支えた。家々の床下に穴を掘り、その中に土・草・蚕糞を入れて化学変化を誘引することで作られた塩硝は、加賀藩に買い上げられ、米の取れない五箇山に金銭の収入をもたらした。

城端の春を彩る城端曳山祭

また、合掌家屋の屋根裏部分で行われた養蚕は、五箇山に限らず、平野部にも繁栄をもたらした。五箇山で作られた繭は、五箇山街道を経て城端に運ばれた後、上質の絹織物へと仕上げられ、江戸時代には城端絹織物として京都や大阪、江戸へと市場を拡大した。この城端絹織物の隆盛は、ユネスコ無形文化遺産に登録された城端曳山祭の成立につながったのである。

「土徳」

五箇山街道を介した五箇山と平野部の結びつきは、物質的なものに限らない。むしろ精神的な結びつきが、両地域をより有機的に結びつけた。

例えば、室町時代に北陸に浄土

真宗を伝えた綽如上人は、井波に瑞泉寺を開いたが、その遺品の一部は、栃原峠の五箇山側にある麓の真宗道場に伝えられていたという。また、蓮如上人の門弟である赤尾道宗によって五箇山に浄土真宗が布教されると、五箇山の各集落に念仏道場が設けられ、「講」という仏の教えを学ぶ寄り合いが形成された。瑞泉寺に端を発する井波彫刻は、五箇山の念仏道場や寺社群にも見ることができる。

浄土真宗が五箇山に浸透する中で、「結」や「合力」と呼ばれる精神が人々をつなぎ、互いに支え合いながら暮らす五箇山の生活が築かれていった。昭和20年、民藝運動の創始者である柳宗悦は、南砺に疎開していた世界的板画家の棟方志功を訪ねた際に、こうした五箇山を含む南砺全体に広がる精神風土を「土徳」と表現した。土地の持つ大きな力によって、そこに暮らす人々に美しい心が備わり、南砺ならではの風土を作り出す。南砺ではこのような循環が繰り返され、多様な文化や産業が育まれてきた。

井波彫刻の見られる五箇山の古刹・行徳寺

SDGs未来都市 —「一流の田舎」を目指して—

南砺を取り巻く土徳文化は、現代のまちづくりにも生かされている。本市では、地域資源を活用した小さな循環による持続可能な社会の構築を目指し、さまざまな取り組みを進めている。

小規模多機能自治はその一例である。市内31の地域づくり協議会によって、住民の積極的な参画を通した、住民自治による地域課題の解決が図られており、その活動を伴走支援するため「（一社）なんと未来支援センター」を設立し、新たな住民自治をサポートしている。

また、コミュニティビジネスを支える取り組みとして、平成31年には、市内外から募った寄付を原資とした市民ファンド「（一財）南砺幸せ未来基金」が設立された（同年12月に公財に移行）。この基金は、地域のまちづくり活動の資金的支援や、コロナ禍における緊急支援を行い、地域づくり協議会による高齢者への買い物支援や、テークアウトメニューに取り組む飲食店の配達料補助に役立てられている。

さらに、エコビレッジ事業として、再生可能エネルギーの地産地消も進めている。市内の森林整備で出た樹木や間伐材の利活用促進に加え、木質ペレットストーブの普及を図るなど、市産材の活用を通じた森林資源の域内循環と地域内の経済循環を進めている。

これらの取り組みは、国連が平成27年に採択したSDGs（持続可能な開発目標）とも呼応する。本市は令和元年7月にSDGs未来都市に選定され、日本のSDGsモデルの構築を先導することとなった。

本市は、「誰ひとり取り残さない、誰もが笑顔で暮らし続けられるまちへ《世界に誇る一流の田舎》」を目指すべき姿として位置付けている。その答えは、五箇山街道を介した循環が育んだ土徳文化にあるともいえよう。「懐かしい未来」を目指した歩みは、とどまることなく続く。

一口メモ　五箇山街道

加賀藩の重要路―五箇山街道 朴峠道

五箇山の合掌集落から城端などの平野部に通じる峠道は、総称して五箇山街道と呼ばれた。中でも朴峠を越える道は古来より往来が多く、この道を利用して加賀藩の産物である塩硝や紙、生糸などが城端へと運ばれ、集落の暮らしに必要な生活物資を五箇山に搬入。さらには、五箇山を管理する加賀藩の要人が通行する最も重要な街道であった。

現在、市指定史跡となっている五箇山街道の峠道には、豪雪から避難するためのお助け小屋跡や旅人の安全を見守った地蔵など、往時を伝える史跡が数多く残されている。

企画協力：全国街道交流会議「街道交流首長会」